慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アンソニー・ギデンズの権力論 : 構造化理論における資源の概念をめぐって
Sub Title	Giddens's discussion on power : a critique of the concept of "resources" in "structuration theory"
Author	菅野, 博史(Kanno, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1991
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.31 (1991.) ,p.29- 36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000031-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アンソニー・ギデンズの権力論

——構造化理論における資源の概念をめぐって——

Giddens's Discussion on Power: A Critique of the Concept of "Resources" in "Structuration Theory"

菅　野　博　史
Hiroshi Kanno

Anthony Giddens tries to reconstruct a social theory through his "Structuration Theory". And he insists a theory of power is able to be explained within his theoretical framework.

This paper intends to examine Giddens's discussion on power in terms of his concept, "resources". And the author takes up his "Structuration Theory" from this viewpoint. The course of the author's argumemts is as follows:

(1) His notion of power described in a complicated way is set out as clearly as possible.
(2) The relation between his notion of power and his conception, "Duality of Structure" is explained. According to Giddens, the concept of "resources" plays an important role in this relation.
(3) After his concepts are scrutinized, his theory of power and his "Structuration Theory" are proved to be incompatible.
(4) Finally, the author concludes that Giddens's "Structuration Theory" as such should be criticized because of his figurative definitions.

目　次

0. はじめに
1. 行為と権力
2. 権力と資源
3. 資源と構造
4.「構造の二重性」と資源
5. ギデンズの権力論の問題点
6. 構造化理論における言語学的比喩について

0. はじめに

アンソニー・ギデンズ (1938—) は，現在のイギリスを代表する社会学者であり，自らの理論の全体像を「構造化理論 (Structuretion Theory)」という名の下に，体系的に提示している屈指の理論家である。彼の構造化理論は，社会 (学) 理論の再構成を目指すものであり，機能主義，構造主義，ポスト構造主義，現象学，解釈学，シンボリック・インタラクショニズム，エスノメソドロジー，精神分析学，批判理論，マルクス主義等々を批判的に咀嚼しながら，自らの体系の内へと包摂しようとする，驚くべき理論構築の試みであると言える。

しかしながら，本稿においては，ギデンズの構造化理論を正面切って取り上げるのではなく，まず彼の権力論を検討し，そこから彼の構造化理論を逆照射するという迂回路をとることにしたい。論述の手順を示せば以下のようになる。①ギデンズの権力についての錯綜した議論を出来るだけ明快に紹介し (目次の 1. と 2. に該当する)，②権力論と構造化理論との連関を明らかにし (目次の 3. と 4. に該当する)，③彼の権力論と構造化理論が両立しないことを示し (目次の 5. に該当する)，④その原因を構造化理論自体の持つ基本的な問題点のうちに見いだすことを試みる (目次の 6. に該当する)。

ここで結論を先に述べてしまえば，我々は最終的にギデンズの権力論と彼の構造化理論の双方に対して否定的な評価を下すことになる。けれども，これは，我々がギ

デンズの議論全体に対して否定的に関わることを意図しているからなのではなく，彼の議論のうちで肯定できる部分と肯定できない部分とを選り分ける作業を行い，新たな権力論や社会理論の構築のための布石を用意することを意図しているからなのである。蓋し，批判とは，単なる脱構築の作業に終始するものではなく，同時に再構築，すなわち継承的批判＝批判的継承の契機をも含むものであらねばならないからである。

1. 行為と権力

ギデンズは，行為の概念を次のように定義する。即ち，「行為とは，身体的存在が世界一内一事象の進行過程に，その時点で，あるいは企図的に，因果的な介入を行う流れである[1]」，と。従って，「行為は，本質的に結果を達成するための「手段」の適用を伴っており，事象の経過における行為者の直接的介入によって生じる[2]」ものだとされるのである。

一方，ギデンズによれば，最も一般的な意味における権力とは，人間の変形能力 (transformative capacity) を意味するものであるとされる。ここでいう人間の変形能力とは，人間による自然の変形と人間社会の不断の自己修正的な変形との双方に関わる，人間の「できる」能力のことである。こうした人間の変形能力という概念は，マルクスにおいて，労働の自己媒介過程として社会分析の中心に据えられていたものである。ギデンズは，このマルクスの基底的な分析枠組みを踏襲しながら，権力を以下のように定義するのである。「人間の行為作用の有する変形能力という意味での権力は，一連の事象の経過を変化させるために，その一連の事象に介入する，行為者の能力のことである[3]」，と。

ギデンズはこのように，事象的な因果連関に変化をもたらす人間の能力，すなわち人間のもつ変形能力それ自体を権力と呼ぶのである。さらに上の定義から明らかなように，ギデンズは，行為の帰属先としての行為主体は，人間の変形能力の帰属先でもあると考えている。もっと正確に言えば，人間の変形能力が存在しなければそもそも行為というものが成立しないがゆえに，人間の変形能力は行為主体という概念の成立条件ですらあると見なしているのである。こうして，ギデンズの定義においては，行為の概念の内に，論理的に変形能力という意味での権力がつねにすでに含意されていると言えるのである。

しかし，このようにして，「行為と権力は論理的に結びついている[4]」と主張したところで，それが単なる定義の問題に止まる限り，権力現象の何たるかが具体的に明らかになるというわけにはいかない。また，こういった権力の定義では，我々が日常的に思い描く権力のイメージともかなりのズレが生じてしまうように思われる。我々がギデンズの権力の定義に対して抱くこういった疑問は，広義の権力と狭義の「権力」との概念的区別のうちで解消される。つまり，ギデンズによれば，いままで述べてきたような人間の変形能力という意味での権力は広義の権力として位置づけられ，以下のような狭義の「権力」の背景をなすものだとされるのである。彼に従えば，「狭義の，関係的意味における「権力」は，相互行為の属性であり，結果の実現が他者の行為作用 (the agency) に依存する場合に，そうした結果を確実なものにする能力として定義される[5]」ようなものである。換言すれば，狭義の「権力」とは，「行為者が自らの欲求に他者を従わせようとして，使用する変形能力[6]」のことを指しているのである。我々が他者に対して「権力」を行使するという時には，通常，こういった意味の下においてであり，これがギデンズのいう支配 (domination) としての「権力」なのである。約言すれば，広義の権力も狭義の「権力」も，それが人間の変形能力であるということには変わりはないのだが，より範囲の限定された，対人的な関係の内で行使される変形能力が，ギデンズのいう意味での狭義の「権力」の実質をなしているのである。

行為と権力の概念をめぐってギデンズが強調したいことは，これら二つの概念の間の切り離すことの出来ない共軛性なのであり，それら相互の間の基底的なつながりなのであると言うことができよう。(以下の論述では，特に断らない限り，権力という言葉は，ギデンズのいう狭義の「権力」の意味で使用することにする。)

2. 権力と資源

「相互行為における権力の行使は，参加者が相互行為を生産するための要素として持ち込み，動員する資源 (resources) の観点から理解することができる[7]」，とギデンズは述べている。彼に従えば，この場合の資源とは，権力が行使される際の媒体 (media) であり，相互行為の過程で認識能力をもつ行為主体によって使用され，再生産されるものであるとされるのである[8]。

ギデンズによれば，こういった資源には二つの種類のものがあるとされる。即ち，配分的資源 (allocative resources) と権威的資源 (authoritative resources) である。配分的資源という概念は，具体的には，①環境の

物質的特性（原料，物質力の源泉），②物質的生産／再生産の手段（生産の道具，技術），③生産物（①と②の相互作用によって作られた人工物）を表している[9]。他方，権威的資源は，①社会的時一空間の組織（行路(paths)と領域の時間的一空間的構成），②身体の生産／再生産(相互的結合における人間の組織と関係)，③ライフ・チャンスの組織（自己展開と自己表現のチャンスの構成）を示すものだとされている[10]。さらにまた別の定義によれば，配分的資源は，物(objects)や財(goods)，つまり物質的な事象に対する制御(command)を生み出す能力，もっと正確に言えば，変形能力のタイプを意味するものであるのに対し，権威的資源は，人間や行為者に対する制御を生み出す変形能力のタイプを意味するものだとされているのである[11]。

このように二種類の資源の存在を区別することには，一方におけるマルクス主義と他方における産業社会論の双方の思想を批判する意図が込められている[12]。ギデンズによると，マルクス主義は，権力を配分可能な資源（財産）と結びつけることは行うが，権限(authority)の問題に対する配慮を欠いている。したがって，社会主義社会における権限の性質という問題に答えることができないのである。産業社会論では，逆に，配分は権限の特殊事例だと見なされる（例えば，ダーレンドルフは，所有は権限の特殊事例だと主張する)。つまり，ギデンズの用語でいうと，配分的資源が権威的資源へと一元化されるのである。それゆえ，産業社会論においては，社会主義社会と資本主義社会との根本的な相違が極小化され，両者の間に存在する差異が見えなくなってしまうのである[13]。

このような含みを有する資源という概念が，ギデンズの権力論の要諦をなしていると言うことができる。しかしながら，ギデンズが構築した理論的脈略においては，権力現象も構造化理論という大枠のうちに位置づけられるがゆえに，我々は，この資源という概念自体の検討に移る前に，資源と構造との関係について先に論じておかなければならない。

3. 資源と構造

ギデンズは自らの構造の概念を次のように説明している。

「社会学における構造分析へのアプローチは，私が単純に「発話」（行為と相互行為）と呼ぶものと，話し手の共同体の抽象的「特性」である「言語」（構造）とを比較することによってなされる。（中略）(a) 発話は「状況づけられている」，すなわち空間的，時間的に位置づけられているのに対して，言語は，リクールが言うように，「虚像的(virtual)であり，時間を超越」している。(b) 発話は主体を前提とするのに対して，言語は本質的に主体が不在である。——言語も，話し手がそれに精通し，話し手によって生産されないかぎりは，「存在」しないのだが・・・。(c) 発話は，常に潜在的に相手の存在を認めている。コミュニケーションの意図を促すものとして，その重要性は根本的なものであるが，それはまたオースティンが明らかにしたように，他の多くの「発語内的効果」の志向的な媒介でもある。他方，構造としての（自然）言語は，ある主体が意図した生産物ではないし，相手を志向するものでもない。要するに，これを一般化すると，実践は主体の状況づけられた行いであり，意図された結果に照らして吟味され，相手や他者からある反応や一連の反応を確保するという志向を含んでいるのに対して，構造は，特定の社会的一時間的位置づけをもたず，「主体の不在」によって特徴づけられ，主観一客観の弁証法によっては枠づけすることができないものだということになる[14]。」

引用から明らかなように，「個々の発話という実践に対比される，主体不在の，言語の体系の如き共同体の抽象的な特性」，これがギデンズによって構造と呼ばれるものである。従って，ギデンズの構造概念が，構造主義者の使用する構造概念に近いものであることは見易いところであろう。しかし，ギデンズは，構造主義者（特にレヴィ・ストロース）の主張する構造概念が，単に行為者を拘束するものとして捉えられていることに異議を唱え，構造を拘束態(constraining)であるとともに，行為主体の行為を可能にする可能態(enabling)の側面をも持つものであると主張するのである。さらに，構造主義の構造概念には，時間性の契機が抜けて落ちいることを指摘し，これらの欠陥を補うためには，構造は構造化の局面において考察されねばならないと強調するのである。

「私は既に，構造が「主体不在」であることを指摘した。相互行為は，主体の行為において，またそれによって構成されるのである。「構造化」とは，実践の再生産として，諸構造がそれによって生じることになる動的過程のことを抽象的には指すのである。構造の二重性は，社会構造が人間の行為作用によって構成されるだけでなく，同時にそうした構成のまさに「媒介」でもあることを意味している。（中略）人間の行

いの観察から推論されると同時に，そのような行いがそれによって可能となる媒介としても作用するという，この構造の二局面は，構造化と再生産の概念を通して把握されねばならないのである[15]。」

こういったギデンズの構造概念の定式化において重要なのは，次の2点である。

(1) 主体不在の構造は，行為主体によって構成されるとともに，行為主体の行為は，この構造によって可能となる。つまり，構造とは，人間行為の結果であるとともに媒介でもあるのである。これが「構造の二重性」とギデンズが呼ぶ事態である。さらに，この過程には，契機 (moment) (つまり個々の諸実践) と全体性 (totality) (すなわち構造)，現前 (presence) と不在 (absence) の弁証法が存在し，社会的行為の形態が全体社会の構造的特性と弁証法的に結びつくのである。すなわち，「構造の二重性」は，相互行為というミクロのレベルと全体社会の構造的特性というマクロのレベルとをつなぐロジックでもあるのである。

(2) 構造は構造化のうちでのみ把握される。つまり，構造は構造化という動態的過程のなかで，常に生成変化の相にあるものとしてのみ捉えることができるのである。この構造化という概念によって，時間性の次元とともに，能動的な主体としての行為者の次元が，ギデンズの構造化の理論のうちに組み込まれることになるのである。

次にギデンズは，構造概念をより明確なものとするためには，構造とシステムとを峻別しなければならないと主張する。

「社会関係を分析する際，我々は，状況づけられた諸実践の再生産に関わる時―空間における社会関係のパターン化，すなわち統辞論的次元と，そのような再生産において含意される再帰的な「構造化の様式」の虚像的な秩序，すなわち範列論的な次元の双方を認識しなければならない。(中略) 社会分析において，構造は社会システムにおける時―空間の「接合」を可能にする構造化特性を意味する。それは，時間―空間的に変化する範囲上に存在する目に見えて同様な社会的実践を可能にする，そして社会的実践に「システムの」(systemic) 形態を付与する特性である。構造が変換関係 (transformative relations) の「虚像的な秩序」であるということは，再生産された社会的実践としての社会システムは「構造」を所持せずに，「構造特性」を示すのだということと，そのような実践における構造の現実化 (instantiations) においてのみ，時間的―空間的現前として，また認識可能な人間の行為主体の行動を志向する記憶痕跡として，構造が存在するのである，ということを意味するのである[16]。」

引用において明白に示されているように，ここでは構造とシステムの相違が，言語学における範列論的次元，既ち諸要素の虚像的な秩序と統辞論的次元，つまり時空間におけるそのパターン化に準えて説明されている。このことの有する含意については後で論じることにして，構造とシステムという概念的区分の要点を纏めておくと以下のようになる。構造はシステムの特性であり，主体の不在によって特徴づけられる。その意味で構造は，時間，空間を超越した虚像的な秩序，すなわち範列論的な差異であるといえる。一方，社会システムは，社会的相互行為のシステムであり，人間主体の状況づけられた活動からなる。またそれは，特定の時間―空間において社会関係のパターンとして統辞論的に存在するものである。従って，システムが構造を，あるいは構造特性を持つのであって，システムそれ自体が構造だというわけにはならないのである。

構造とシステムについての，ギデンズ自身が下した最も簡略な定義を示せば，表1のようになる[17]。

表 1

構　造	社会システムの特性として組織化される規則と資源。 構造は「構造特性」としてのみ存在する。
システム	規則的な社会的実践として組織化される，行為者間ないしは集合体間の再生産される関係。

ギデンズのシステム概念は，機能主義者の用いる記述概念としての「構造」の概念，すなわち社会関係のパターンという概念のもつ含意を自らの理論のうちに取り入れたものだと言える。つまり，機能主義的な構造概念にギデンズは「システム」という名称を与えたのである。このようにして，ギデンズは，構造特性としてのみ実践に介入する，社会システムを構成する契機としての構造，という独自の構造概念を提示し，それを自らのシステム概念と区別することによって，構造主義と機能主義の双方の構造概念を構造化理論の枠組みのなかへと併存的に導入することを試みているのである。

さて，表1において注目すべきなのは，構造概念のうちに資源の概念が含まれているということである。すなわち，ギデンズの構造化理論においては，資源が構造の一部を成しているのである。そこで，このことが何を意

味し，ギデンズがなぜ資源を構造のうちに定義しなければならなかったのかを次に見ていくことにしよう。

4.「構造の二重性」と資源

先に述べておいたように，構造とは行為の媒介であるとともに行為の結果なのでもあった。これをギデンズは「構造の二重性」と名付けたのである。この「構造の二重性」という事態を具体的に説明するために，ギデンズが持ち出す例がいつも決まって言語の例であるということは，ここでの注目に値する。ギデンズが言及するのは，例えば次のような例である。発話というものを考えてみたとき，文法的に正しい個々の文の発話を行うことが全体としての言語を構成する統辞論的規則の不在のコーパスを生産すると同時に，それを前提にして初めて個々の発話が可能になることがわかる云々・・・[18]。ギデンズに従えば，このような例が示しているのは，まさに言語の規則は，発話という行為の媒介であるとともに発話という行為の結果でもあるということである。従って，彼の考えでは，まさしく言語というものが「構造の二重性」を示す典型的な具体例をなすものだとされるのである。そして，こういった言語的規則が構造を構成する「規則」一般へも拡張され，この「規則」一般にも「構造の二重性」が適用される，とギデンズが推及したであろうことは我々の想像に難くない。構造化理論においては，こうして，規則は構造の構成要素だとされるのである。

ところで，構造とは規則と資源から成るのであった。従って，構造を構成するもう一方の要素である資源も「構造の二重性」のうちで捉えられねばならないことになる。ギデンズは，この問題をめぐって次のように述べている。

「社会システムの構造的構成要素としての資源の概念が，構造化理論のうちで権力を扱うさいの鍵概念になっている。変形能力としての権力の概念（これは権力を行為主体の行為の観点から取り扱おうとする人々に特徴的な見解である）と支配としての権力の概念（これは構造的特質としての権力に注意を集中する人々の主要な関心である）は両者とも，資源を使用することに依拠している。しかし，私はそれぞれの見解が他の見解を含意していると考えている。資源というのは，日常的な社会的相互行為のなかで変形能力が権力として使用される際の媒体なのである。しかしながら同時に，資源は，社会的相互行為における資源の使用を通じて再構成される，システムとしての社会システムの構造的要素でもあるのだ。（中略）「権力」は，一方における変形能力という広義の概念と，他方における支配という概念との間を，概念的に媒介する。すなわち，権力は関係概念であるのだが，支配という構造によって生み出された変形能力の使用によってのみ権力として作用するのである[19]。」

ギデンズのここでの主張は，資源が権力を行使する媒体であり，支配構造を再生産する媒体でもあるということである。つまり，権力現象は，相互行為（＝ミクロ）のレベルにおいては資源を使用する変形能力として捉えられ，構造（＝マクロ）のレベルにおいては，制度的な支配として捉えられるものなのである。これは，言語的規則が，相互行為のレベルにおいては言語的規則の媒介的使用として捉えられ，構造のレベルにおいては個々の発話の結果である主体不在の言語的規則として捉えられるのと類比的な事態である。このような権力における「構造の二重性」の関係を図示すれば，図 1 のようになる。

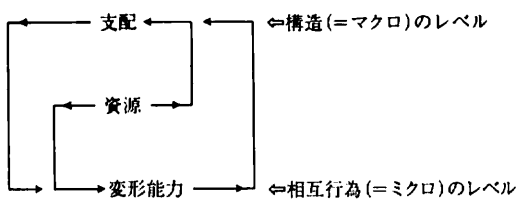

図 1

ギデンズは，このようにして，支配を個々の意思決定のネットワークだと見なす立場（ホッブス，ヴェーバー，ダール等）と，支配をそれ自体，制度的現象だと見なす立場（アーレント，パーソンズ，ブーランツァス等）とを，権力における「構造の二重性」という枠組みのうちで統合しようと図っているのである。

もしギデンズのこの構想が理論的に成功しているのだとすれば，それは権力論を新たな展開へと導くものであるといえよう。しかし，この試みは果たしてうまくいっているのであろうか。我々は，次にこの点について検討しなければならない。

5. ギデンズの権力論の問題点

権力をめぐるギデンズの議論には，いささか不明瞭な点が見受けられる。そして，それはギデンズの使用する資源という概念の曖昧さに由来しているように思われる。つまり，ギデンズにとって，資源とは，人間の変形能力を意味するのか，それともそれが通常意味するよう

な稀少な物質を指示するものであるのか，曖昧なのである。初めに後者の場合での解釈を，次に前者の場合での解釈を取り上げて，それぞれについて検討を加えていくことにしよう。

ギデンズの配分的資源の具体的内容は，①環境の物質的特性，②物質的生産／再生産の手段，③生産物という三つのものであった。これは，我々が通常「資源」という言葉で理解するものとほぼ一致していると言えるだろう。また，権威的資源の内実をなす，①社会的時一空間の組織，②身体の生産／再生産，③ライフ・チャンスの組織というものも，人間の社会関係における関係的資源として捉えることが可能なものだと考えることができそうである。そして，資源をこのように理解すれば，図1における，資源を媒体とした「構造の二重性」の理論的な説明力は保たれることになろう。つまり，資源を媒体としてミクロのレベルとマクロのレベルが統一的に把握されうるのである。しかしながら，ギデンズ自身の定義によれば，構造とは「範列論的な差異の虚像的な秩序」を指すものなのであった。従って，ここで根本的な問題が生じてしまうことになる。なぜなら，この構造概念のうちに，上のような資源の概念を割り当てることは，ギデンズが自らたてた構造の定義に抵触してしまうことになるからである。実際，我々はこのような意味での資源というものが虚像的な秩序を成しているなどといった事態がいかなるものであるのかを想像することすらできない。

では，ギデンズが強調するように，資源とは人間の変形能力のあるタイプを意味しているものなのであろうか。すなわち，配分的資源が物や財に対する制御を生み出すような人間の変形能力のタイプを意味し，権威的資源が人間や行為者に対する制御を生み出すような変形能力のタイプを意味しているのだと定義すれば，このような問題は生じないのであろうか。

ギデンズは，他の所で，構造を「社会システムの再生産において再帰的に含意される規則と資源。構造は，記憶痕跡として，人間の認識能力の有機体的基礎として行為において現実化されるものとしてのみ存在する[20]」という形で定義づけている。そして，この定義は変形能力としての資源という含みをも配視した上での構造の定義になっていると考えることができる。しかし，たとえこうした定義によって構造に資源が含まれることを概念的に認めたとしても，資源を人間の変形能力のあるタイプだと解釈するならば，図1における「構造の二重性」のもつ説明力が失効してしまい，権力現象のミクロレベルとマクロレベルを統一的に把握するというギデンズの構想自体が崩壊してしまうのである。なぜなら，図1における資源が変形能力のあるタイプを意味しているものであれば，資源は広義の権力概念と一致するような変形能力概念の下位概念となり，権力現象の媒体としての資源という含意がすっかり崩れてしまうことになるからである。

資源を相互行為の媒体となるようなものとして解釈すれば，資源の概念が構造の概念と矛盾してしまう。しかるに，資源を変形能力の或るタイプであると解釈すれば，「構造の二重性」が上手く説明できなくなってしまう。このように，資源という概念をどのように解釈しようとも，ギデンズの理論はディレンマに陥ってしまうのである。では，何故こういったディレンマが生じてしまうのだろうか。我々は最後に，この問題を論じておかなければならない。

6. 構造化理論における言語学的比喩について

ギデンズの構造の概念は，ギデンズ自身が否定するにもかかわらず，明らかに言語（学）からの類推に基づいている。すなわち，ソシュール的な差異にもとづく範列論的な虚像的秩序の全体が構造と呼ばれているのであって，このような構造概念が言語（学）の影響の下にあることは明白であるように思われるのである。ギデンズが言うように，こういった構造は，もちろん主体不在であり，発話の際にのみ現実化するような，現前と不在の弁証法を満たすものであろう。さらに，ギデンズが行ったように，規則一般にまでこの言語学的な構造概念を拡張することも可能かもしれない。しかしながら，理論の射程をそれ以上にまで拡げるときには，彼はもう少し慎重であらねばならなかったように思われる。何故なら，我々が見てきたように，資源という概念は，こういった構造概念のうちにはうまく収まらないものなのであり，それを無理やりに構造概念のうちに押し込めようとするといろいろな弊害が生じてしまうからである。（もちろん，ギデンズ自身も「構造の二重性」を様相（modalities）という概念を使って，言語学的な比喩から離れたところで説明しようと試みているのであるが[21]，構造化理論で前面に押し出されている構造の定義と整合性を保たねばならない関係上，あまり成功しているとは思えないものになっている。）

では，ギデンズがなぜ構造の概念を言語学的比喩に頼りながら語るのかといえば，それが「構造の二重性」を一番上手く説明するものだからである。構造は行為の結果であるとともにその媒介でもあるという「構造の二重

性」や現前と不在の弁証法といった事態は，言語の例において最も明らかな種類のものなのである。しかし，この意味での言語（学）的規則の媒介性と資源概念のもつ媒体性は，同じく「構造の二重性」をもたらすものであっても，いままでの論述からも明らかなように，その内実において峻別されねばならないものである。結局のところ，構造や「構造の二重性」といったギデンズ理論の肯綮をなす概念が言語学的な比喩のもとで語られていることがギデンズの権力論に矛盾をもたらした一つの大きな原因である，と言うことができるように思われる。

我々は，権力論においてギデンズがディレンマに陥ってしまったように，ギデンズの主張する構造とシステムという概念区分もまたあるディレンマを生みだすものであるという根拠を，再び彼の言語学的比喩のうちに見いだすことができる。

ギデンズによると，構造の構成要素である規則には，構成的規則(constitutive rule)と規制的規則(regulative rule)という二種類の規則が存在するとされている。ただし，構成的規則と規制的規則はお互いから独立に存在するのではなくて，規則というものが持つ二つの局面であるとされているのであるが。このうち，構成的規則は意味作用という社会構造を生み出すものであり，規制的規則は正当化という社会構造を担うものであるとされている。そこで，我々は，ギデンズのいう構成的規則に注目して，その定義のうちにあるディレンマが生じてしまうことを明らかにしてみよう。

言語学に従えば，ある発話における，単語と単語との線型的な関係を示すのが統辞論的な関係であり，どの単語が他に併存しているもろもろの単語の中から選ばれるのかという選択の関係を示すのが範列論的な関係であると言える。したがって，これらは意味作用を担っている構成的規則の二つの側面であると考えることができる[22]。この時，構成的規則における範列論的な秩序は，確かに，ギデンズが想定するように，差異によって構成される虚像的な秩序であると見なすことができるものである。しかしながら，ギデンズ自身の定義にしたがえば，統辞論的な関係はシステムの次元に属するものとされるがゆえに，意味作用という構造には，範列論的な関係のみが属していることになってしまう。範列論的な関係は，それのみでは意味作用の構成的規則たりえないことは明らかであるから（統辞論を欠いた範列論のみで構成的規則を代表させることはできないから），ギデンズの構造（とシステム）の定式化自体がその内実を裏切っていることになってしまうのである。

さらに規則一般について考えてみても，我々は同じような背理に行き当たってしまうことに気づく。ギデンズは，構造には規則のもつ範列論的な側面を，システムにはその統辞論的な側面を割り振っているのであった。このことは，構造には諸事項間の対立的な差異は存在しても，諸事項相互の間の関係のパターンを見いだすことはできないということを意味している。ところで，ギデンズによれば，規則とは構造の構成要素をなすものでもあった。従って，ギデンズ自身の言説に忠実に従えば，構造において，「規則の範列論的な側面イコール規則そのもの」という背理が成立してしまうのである。そしてこれは，範列論と統辞論とが合わさって一つの言語規則が構成されるにもかかわらず，それらを切り離して範列論的側面にのみ規則を専一的に帰属させるというギデンズの構造の定義における混乱に由来しているものなのである[23]。

ギデンズの構造化理論は，構造概念自体が言語学的な定義によって与えられるために，言語学的な比喩に満ちている。従って，それを社会理論と接合する際には細心の注意が必要とされねばならないのであり，またそれは単なる比喩のままであってはならないのである。しかし，ギデンズの理論においては，言語理論が単なる比喩の役割を果たしているだけではなく，誤解を招く有害な類推の手段ですらあるように思われる。そのため，我々としては，ギデンズの理論における言語学的な比喩を可能な限り排して，その「可能性の中心」において，つまり個々の概念の持つ内実に則してその理論を再検討していかなければならないのである。

権力論で言えば，ギデンズの理論を発展的に継承していくためには，彼の構造化理論の図式に拘わることなく，ギデンズの問題意識の核を成している以下のような問題を我々なりに究明していかなければならない。

① 相互行為のレベルにおいて，構造はいかなる働きをしているのか。

② 通常の意味での「資源」と権力はいかなる関係にあるのか。

③ 社会全体に関わる支配と相互行為レベルでの権力はどういう関係をもっているのか。

確かにギデンズの理論は，我々がこのような問題を考える際のきっかけを与えてくれるものではある。けれども，今まで見てきたように，彼の理論はこれらの問題に対して満足のいく解答を与えてくれるものではない。そこで最後に，ギデンズの理論が有している基本的な前提に対する我々なりの批判点を提示して，理論の前進をは

かるための一助としておきたい。

①の問題に対して，ギデンズは人間の変形能力という概念を提出しているが，権力現象をどこまで個々人のもつ変形能力というアトム的な単位に還元してよいのかは疑問である。このような考えを突き詰めれば，権力現象はある行為主体の変形能力に帰属することになり，ギデンズ自身が提出した「支配の弁証法 (dialectic of control)[24]」という概念をも裏切る結果になりかねない。②の問題は，配分的資源と権力との関係としてギデンズの理論のうちでは捉えることができるが，配分的資源それ自体が彼の権力の定義の本質的な部分を形成しているために，逆に両者の関係が見えにくくなってしまうという憾みがある。③の問題は，資源の使用を通じて構成される「構造の二重性」によって解決されるとギデンズは考えているが，この解決が問題含みのものであることは我々が今まで見てきた通りである。

我々の提出した問題は，ギデンズの理論においてばかりではなく，すべての権力論にとって解かれるべき問題を形成している。そしてこのような問題に対して我々なりの答えを見いだしたときに，我々は初めてギデンズの権力論を完全な形で批判したと言えるのである。

註

1) Giddens, Anthony, "New Rules of Sociological Method: A Positive Critique of Interpretative Sociologies", Basic Books, Inc., Publishers, 1976, (以下 NRSM と略記) p. 55
2) ibid., p. 110
3) ibid., p. 111
4) Giddens, Anthony, "The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration", Polity Press, 1984, (以下 CS と略記), p. 14
5) NRSM p. 111
6) Giddens, Anthony, "Central Problems in Social Theory: Action, structure and contradiction in social analysis", University of California Press 1979, (以下 CPST と略記), p. 93
7) NRSM p. 112
8) ibid., pp. 15-16
9) ibid., p. 258
10) ibid., p. 258
11) ibid., p. 33
12) CPST pp. 100-101
13) ギデンズは，資本主義と国家社会主義の違いを次のように述べている。「資本主義においては，経済生活の主要部分を市場機構の働きにゆだゆる経済と政体の分離が，諸階級が存在することの条件となっている。他方，国家社会主義社会においては，私有財産の廃絶により，経済が政治管理の下での指令的統制に従属的なものとされるにいたり，資本主義との非常に根本的な相違が，それにより生み出されたことは疑いない。」引用は，Giddens, Anthony, "The Class Structure of the Advanced Societies", Hutchinson University Press, 1973,『先進社会の階級構造』市川統洋訳，みすず書房，1977, p. 264
14) NRSM pp. 118-119
15) ibid., pp. 121-122
16) CS p. 17
17) CPST p. 66
18) Giddens, Anthony, „Profiles and Critiques in Social Theory", The Macmillan Press Ltd., p. 37
19) CPST p. 92
20) CS p. 377
21) 例えば CS p. 29 などを参照。
22) 厳密に言えば，構成的規則のみが独立して意味作用を担っているわけではない。既述したように，規制的規則と構成的規則とは分析的にのみ切り離せるものだからである。しかしこのことは，ここでの論旨には響かない。
23) この混乱は，ギデンズが様々な理論的な潮流を，自らの理論のうちへと包摂しようとして自身で招いたものであると考えられよう。
24) ギデンズは，「支配の弁証法」について「時間と空間を超越して，ある連続性を享受している社会システムに内在する権力は，社会的相互作用の文脈における行為者と集合体との間の自律と依存の規制された関係を前提している。しかし，依存のすべての形態は，それによって従属している人々が上位の人々の活動に影響を与えることができるような資源を提供しているのである。」〔CS p. 16〕と述べている。つまり，支配は支配者の側が一方的に服従者に影響力を及ぼすものではなく，服従者の側も支配体制を再生産することに加担する双方向的な流れの内に存在するものだとされるのである。